俺と豚の生姜焼き

book-fukunokami

俺と豚の生姜焼き

「俺も豚の生姜焼きを食うんだ」
　俺は豚の生姜焼きをやってる定食屋のお姉さんの前で叫んだ。
「はい、はい、豚の生姜焼きですね、叫ばなくても大丈夫ですよ」
　年下のお姉さんは叫んだ。
「お姉さん、お姉さがさけぶのですか？」
「お姉さじゃありません、あなたより年下です」
「では、私より年下のお姉さん、お姉さんが叫ぶのですか？」
「あなたの姉妹ではありません」
「では、私とは姉妹ではない年下のお姉さん、お姉さんが叫ぶのですか？」
　そのやりとりは俺達が漫才師になったかのようであった。